

中長期目標 (学校ビジョン)	聴覚障がいのある幼児・児童・生徒一人一人の教育的ニーズに対応した適切な教育を行い、自立と社会参加に向けて豊かな心とたくましく生きる力を育てる。	めざす子ども像	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; background-color: #f9cb9c;"> 【知】学び合う子 【徳】かなえる子 【体】やりぬく子 </div>	今年度の基本方針	<基本方針> 1. 一人一人のきこえに応じた学びの充実 2. 子どもたちが主役となり「わかる」「できる」「たのしい」と感じる授業づくり・保育づくり 3. 自分のきこえを知る・自立活動の充実 4. 自分のよさを知り、のびす、夢に向かう取り組みの推進 5. からだを動かす楽しさを知り、からだづくりを生活の中に位置づける		<学校の合い言葉>「鳥聾愛」 <学部テーマ> ○幼稚部…思いをこばに ○小学部…レッツ チャレンジ! ○中学部…Let's Enjoy ○高等部…夢をつかめ! ○支援部…めざせ! みんなの頼れるサポーター!!
--------------------------	---	----------------	--	----------	---	--	--

年 度 当 初				評 価 結 果 ()月		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	改善方策
[知]学び合う子 1. 社会で生き抜く力を身につける ①一人一人のきこえに応じた学びの充実 ②「わかる」「できる」「たのしい」と感じる授業づくり	(幼)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の思いを伝えたい気持ちがある。 きこえにくさにより情報量が少ない。 	身振りや手話、キューサイン、音声などでびのびと自分の思いや考えを伝えようとしている。	<ul style="list-style-type: none"> 子どもの目線になり、気持ちに寄り添い、様子や気持ちにことばを添えたり、手本を示したりする。 身近な自然現象や事象をトピックスとして取り上げることばと繋げたり、絵日記発表で思いをこばにする手本を示したりする。 	・教師の身振り手話、キューサイン、音声などの手本を模倣し、自分の思いを表現したり、絵日記を使って、自分の経験を伝えようとしたりするようになってきた。 ・教師がトピックスとして取り上げようとしていることが、子どものその時の興味・関心に沿わず、模倣したり伝たりしようとしなないことがある。	・子どものその時の興味・関心や伝えたい事を見極めて、代弁するように手本を示す。 ・複数でやりとりの手本を示すなどのTTの指導や支援を意識する。
	(小)	<ul style="list-style-type: none"> 聞こえや発達段階に個人差があるが、意欲的に学ぼうとしている。 考えて解く・まとめる等の学習では、あきらめてしまうことがある。 	相手に分かるように自分の思いや考えを伝えようとしている。	<ul style="list-style-type: none"> 体験的な学習の機会を多く設定し、ことばの土台を育てながら、思いや考えを発表する場を設ける。 学部研究を通して、実態把握を行い、児童に合った目標設定、授業作りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 行事の事前・事後学習、田植えや野菜の観察・収穫等の体験学習を通して、ことばの拡充を図った。 できるだけ集団で学習する機会を設定し、思いや考えを発表した。児童同士で質問や答えをやりとりして、そこに教師も参加することで、発表の型や様々な言い回しを学べるよい機会となっている。 学部研究会では、対象児に検査を実施して、結果を共通理解しながら、児童の実態に合った授業作りを活かしつつある。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校祭や学部遠足等に向けての集団学習で、話し合い活動を多く設定する。児童同士のやりとりでは教師が仲立ちをしながらかえたい思いを育めるよう支援し、さらなることばの拡充を図る。 学部研究会や一人1授業を通して授業を見合ったり、授業や児童について語り合ったりすることで、児童の実態に合った授業作りをさらに進める。
	(中)	<ul style="list-style-type: none"> ルール、やり方が明示してあると取り組みやすい。 学校生活を楽しみにしている。 思いを言語化することに課題がある。 	自分の目標をもって学習に取り組んでいる。	話し合ったり、協力し合ったりする体験の工夫をする。(各種行事の工夫)	高校見学・職場体験・東部総体・校外学習・修学旅行等の各種行事では、学部としての目標と自分の目標の両方を掲げ、学習に取り組んだ。事後学習では、目標に対しての評価を生徒同士で行い、互いに思いや考えを伝え合うことができた。	行事以外の学習でも目標を立てて学習に取り組む、また目標に対しての振り返りをする。目標や振り返りかえりについて、学部内や教科で情報共有を行う。
	(高)	<ul style="list-style-type: none"> 日々の授業に真面目に取り組んでいる。 一人一台端末を日常的に使用している。 言語面やコミュニケーション面でつまずきがある。 	自分の考えを積極的に発言している。	一人一人の生徒の実態を踏まえた分かりやすい授業づくりと、生徒が思考し発言する機会の充実を図る。	学部研究では、日本語能力検定を活用して「文字・語彙・文法」「読解」「聴解」の実態把握を行った。また、実態把握した内容をもとに、指導・支援の方法を話し合った	2学期以降に行う一人1授業をとおして、話合った指導・支援を生かした授業実践や話し合いを進めていく
	(教務部)	<ul style="list-style-type: none"> 素直な子どもが多い一方、消極的な面もある。思いを伝える経験が積み上がってきた。 教師は個別の教育支援計画等に基づいて指導しているが、効果的な活用には至っていない面がある。 	子どもが「わかる」「できる」「たのしい」と感じる授業が展開され、アンケートで「学習がわかる」95%「授業が楽しい」90%と答える児童生徒が増えている。	<ul style="list-style-type: none"> 各教科、各学部間の連絡調整を密に行う。 定期的に教科会をもち、教科指導の充実を図る。 個別の指導計画の記入のポイントを周知し、計画や評価が指導に生かせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業や行事に関して各学部間の連絡調整を密に行うとともに、毎月の出席簿点検を行い授業時数の把握に努めている。 教育課程の作成に当たり、教科会をもち、互いに意見交換を行う機会を設定した。 個別の指導計画の書き方について各学部で確認を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業や行事に関して各教科、各学部間の連絡調整を密に行う。(継続) 毎月の出席簿点検と併せて、授業時数の状況を大まかに把握する。(継続) 必要に応じて教科間で集まりやすいよう時間を設ける。 個別の指導計画の点検を行い、必要に応じて書き方について確認する場を設ける。
	(教育研究部)	「鳥聾スタンダード」による授業作りを行っており、子どもの伝え合う力が向上した。さらに子どもの語彙力を向上するためには「鳥聾スタンダード」の一層の活用と、アセスメントによる実態把握、一貫した指導が必要である。	「鳥聾スタンダード」を効果的に活用するとともに、アセスメントに基づく一貫した指導を教師が協力して行い、語彙の習得に向けて取り組んでいる。	<ul style="list-style-type: none"> 学部研究会を定期的に開き、語彙の習得に向けた指導・支援の検討、「鳥聾スタンダード」重点項目の設定、授業のふり返りを行う。 外部講師を招聘し、指導の改善を行う。 参観週間を設けて授業公開し、授業研究を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 語彙の習得につながる指導・支援や鳥聾スタンダードの重点取組項目を学部ごとに検討し、その内容を含む授業参観シートを作成した。また、鳥聾スタンダードを踏まえた授業作りができていないかを自己チェックし、学部ごとの平均値を出して確認した。 9月の全体授業研究会にて金沢大学の武居渡先生に研究内容と授業について助言を受けた。 教師同士でお互いの授業を見合う機会として参観週間を設けた。 	<ul style="list-style-type: none"> 参観ウィーク期間に一人1授業を校内で公開し、各学部研究会にて授業を研究する。 一人1授業の際は、研究の視点を入れた授業参観シートを活用・作成する。また、鳥聾スタンダードの自己チェックを年間3回行い、学部での平均値の推移を確認していく。 参観ウィークで一人1授業を行う際に、全体授業研究会で受けた助言を生かして授業を行う。
(情報部)	各教師がタブレットやアプリ等を効果的に使う授業が増えてきたが、優れた実践を校内で共有したり、取り入れたりすることが少ない。	「学校における教育の情報化の実態等に関する調査」において「ICT機器を計画的に活用している」と答える教職員が8割以上である。	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器とアプリケーションの使い方・活用法に関する研修やオンラインやオンデマンドの活用に関する研修を定期的に催す。 教職員同士で情報共有できる場を設け、校内のICT活用の促進を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> お役立ち勉強会を2回実施した。参加者は多くはなかったが、ChromebookやMicrosoftOfficeのソフトの便利な活用方法について、教職員へ周知することができた。 教職員同士の情報共有の場を設けることはできていないが、個人間での共有が行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> お役立ち勉強会を引き続き行い、ICT支援員の助言を受けながら、便利なソフトやGoogleWorkspaceの活用方法など、学習や校務に活かせる情報を伝えられるようにする。 ICT機器の活用実践例を集め、年度末には報告会の形で共有できる場を設ける。 	

年 度 当 初					評 価 結 果 () 月			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	改善方策	
[徳]かなえる子 2. こうなりたい自分・夢をもつ ③自分のきこえを知る ④自分のよさを知り、のばす、夢に向かう取り組みの推進	(幼) ・やりとりを楽しみながら共に遊ぶ活動 ・友達へのあこがれや、手本になろうとする気持ち	・好きな遊びがある。 ・友達や他者と関わることを好む。 ・気持ちを伝える言葉や手段が少ない。	楽しく遊んだり活動したりする中で、自分から友達に関わろうとし、自分の良さや友達の良さ、一緒に活動する良さを知る。	友達に伝えられた、友達の気持ちがわかったという達成感や満足感が感じられるように、伝えたいことの身振りや手話、キューサイン等の手本を示し模倣を促す。	・道具の貸し借りや、場を共有して遊ぶことで、自然と子ども通しがやりとりをし一緒に遊ぶ場面が見られるようになってきている。 ・教師の仲立ちを必要とする場面はあるが、教師の促しを受けて、友だちと関わろうとすることが増えてきた。	C	・関わりのきっかけを作ったり橋渡しをしたりする。	
	(小) ・友達や教師と関わろうとする姿の育成 ・自己肯定感の向上	・友達や教師と関わりたい気持ちを持っている。 ・他者との関わりが限定されがちで、自分のよさに気づいていない子どもが多い。	友達や教師との関わりを楽しみ、自分のよさに気づいている。	・コンクールや検定等に挑戦する。 ・教師や友達から自分のよさを伝えてもらう機会を設定する。 ・遊びや集会のゲームを友達と相談して決める等の機会を設定する。	・図工や書道等のコンクールや漢字検定に挑戦したり、日々の学習でまとめたワークシートや模造紙等、絵や作品を廊下に掲示したりする機会を持った。友達や教師に感想を書いてもらったり褒めてもらったりすることで、少しずつ自分のよさに気づき始めている。 ・仲間作り交流会や休憩時間の遊びを児童同士で相談し合うことで、自分の思いを伝えたり相手の気持ち	・引き続き作品や学習のまとめ等を廊下に掲示し、友達や教師から認めてもらうことで、自分のよさを感じることができるような場を設定する。 ・児童同士で話し合う場面で相手の思いや考えを聞くだけでなく、受け止めて取り入れるような関わり方も促していく。	C	
	(中) ・自分を知る ・進路学習 ・進路選択	・素直で、互いを思う気持ちを持っている。 ・自分の良さや課題についてあまり把握していない。 ・将来に対するイメージをあまり持っていない。	自分の良さを知るとともに、相手の良さや思いを受け止め、自分の思いを伝えている。	学年に応じた進路の充実を図る。(職場体験学習や高校見学などの活用)	高校・職場見学や職場体験を通して、中学部卒業後の進路や職業についてイメージをもつことができた。5日間の職業体験での評価をもとに自分の良さや課題について確認したり、友だちの良さを知ったりすることでお互いのことを伝え合おうとする姿が多く見られた	話し合ったり、協力し合ったりする場面を多く設定する。自分の目標がより明確になるように中学部廊下や教室に掲示するようにする。	C	
	(高) 一人一人の生徒の実態を踏まえた目標設定と計画的な進路学習の実施	・自己肯定感が育ちつつある。 ・地域(学校外)や卒業後の生活に意識が向いてきた。 ・自主的・計画的に学習することが苦手である。	進路実現に向け、自主的・計画的に取り組んでいる。	進路実現に向けた目標や活動の明確化と継続的な進路指導により生徒の自主的・計画的な取組を促進する。	各学級で進路学習の計画を立て、LHR等で継続して取り組んだ。各生徒が自己の進路について真剣に考えてはいるが、自主性や進路決定の時期について課題がある	家庭と連携し、適切な情報提供と見直しを持った取組を進めていく。	C	
	(支) ・相談者が安心して頼れる支援体制・支援内容の充実 ・センター的機能の発信の充実	・子ども同士、保護者同士がつながり、知り合い相談し合う機会が年1～3回と留まっている。 ・関係機関等へに対して本校の取組発信が十分とはいえない。	・子ども同士・保護者同士がつながる機会として、合同活動及び保護者研修会を年7回以上実施する。 ・相談者のニーズに応じた迅速な対応や手立てを行うことができる。	・合同活動及び保護者研修会を二ヶ月に1～2回の頻度で計画的に設定し、参加を募る。 ・関係機関に啓発するためのポスター(リーフレット)、HP(支援部ページ)を作成し、発信する。	・計画に沿って合同活動及び保護者研修会を実施(4回実施済み)。家庭の都合や体調不良により参加家庭数が少ない。 ・HP(支援部ページ)を検討し、11月更新予定としている。ポスター(リーフレット)案の素材収集・作成を行っているが、完成には至っていない。	・合同活動及び保護者研修会に関心が高まるよう活動や研修内容の魅力を案内等で発信する。 ・ポスター(リーフレット)を作成し、啓発活動につながるように働きかける。	B	
	(自立活動部) 自立活動の指導を円滑かつ効果的に行うための教職員研修	・発音、言語、障がい理解等に関する教職員研修を行っている。昨年度から、すぐに授業に生かせる研修になることを目標に、研修を計画、実施している。	・アンケートで「授業や子どもとのコミュニケーションに活かせる研修である」と回答した教職員が、8割以上である。	・全体研修会を年1回、言語または発音に関する研修会をそれぞれ年4回実施する。事後アンケートを実施し、目標の達成度把握と研修の改善に生かす。 ・「コミュニケーション手段について」の研修動画を作成し、活用を促す。	・8月に全体研修会を1回行い、全体研修会の研修会の職員アンケートで「良い」という評価が90%以上であった。自立活動勉強会は年4回のうち2回行った。 ・「コミュニケーション手段について(着任研)」の動画は未完成なので、まず作成を急ぎたい。	・全体研修及び自立活動勉強会の職員アンケートの回答内容を鑑み、来年度の全体研修会のテーマや講師の人選を含めた研修内容を考案していく。 ・計画的に研修の動画作成に取り組んでいく。	B	
	(進路指導部) ・ニーズに合った情報提供 ・将来働く上で必要な力の定着	進路に関するニーズが多様であり、体験学習の充実やキャリアパスポートの活用と学部間連携が必要である。	・卒業後や次年度に向け、将来働くために必要な力を身につけるための指導や支援を行っている。 ・キャリア教育の充実に向け、キャリアパスポートを活用するなどして発達年齢に応じたキャリア形成をしている。	・子どもや保護者の考えを聞く機会を設けて実態把握をし、見学先や実習先を決定していく。 ・進路学習や体験学習の成果や課題などを自身で振り返ったり保護者と共有したりするためにキャリアパスポートの活用を進める。	中高それぞれの学部に分かれ、生徒のニーズに合った職場見学を実施することができた。中学部では、進路の選択肢を増やすため高校見学を実施した。高等部では地域の企業を見学し、体験活動をした。就労に向けて求人票の見方に関する説明会を実施したり、就職ガイダンスでビジネスマナーについて学習したりした。	職場見学は引き続き個々の生徒のニーズに応じて必要があれば、実施していく。 障害者就業・生活支援センターやハローワークなどの関係機関と連携を取り、生徒の進路実現に向けて引き続き支援をしていく。 2学期の行事に向けて目標を意識して活動し、振り返って課題を見つけるなど、キャリア教育で育	B	
(総務部) ・幼児児童生徒の頑張りや学校の魅力の発信	・子どもは素直な一方で受身的な面があり、自己肯定感の育成に取り組んでいる。 ・子どもの数の減少に伴い、学校の在籍数も減っている。学校の魅力を一層発信する取組が必要である。	・子どもが自分や友達の良さ、頑張りや思いを互いに認め、たたえ合う姿がある。 ・地域からの入学希望者が各学部にいる。	・表彰伝達や学校通信、掲示物等の充実を図り、子どもが自分の良さや頑張り気づく機会を増やす。 ・学校公開の内容や学校通信の発送方法を見直し、効果的な発信となるよう工夫する。	・表彰伝達や学校通信、掲示物等の充実を図り、子どもが自分の良さや頑張り気づく機会を設けた。 ・小学部児童が自分の頑張りやいろいろな教師に伝える場面が多数見られた。 ・学校公開の内容や学校通信の発送方法を見直し、効果的な発信となるよう試みた。が、地域の小中学校から本校への入学にいたるような動きにはつながっていない。	・表彰伝達や学校通信の発行を丁寧に行う。掲示物(校内・校外)の充実を図り、子どもが自分の良さや頑張り気づく機会をもっと増やす。 ・学校公開の内容や学校通信の発送方法について、目星を付けて案内のアクション送る等、工夫をする。(地域支援の情報データを活用したい)	C		

年 度 当 初					評 価 結 果 ()月	
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	改善方策
[体]やりぬく子 3. あきらめない体力・気力 ⑤からだを動かす楽しさを 知り、からだづくりを生活 の中に位置づける	(幼) ・基本的な生活習慣の自立 ・安全に身体を動かす機会の設定	・身体を動かすことが好きである。 ・身体の機能や体力、運動経験に差がある。	いろいろな遊びや活動の中で自分からすすんで参加し、のびのびと身体を動かす。	・「歌と体操」や「おはようタイム」など毎日取り組む時間帯に身体の動きを意識する活動や身体を動かす活動を設定し、継続して身体作りに取り組む。 ・外部講師による専門的な指導(チャレキング)の機会を設ける。	・教師の手本を見たり、上手に身体を動かすポイントを開いたりして、意欲的に体操やチャレキングに参加し、身体を動かす経験を積んでいる。 ・中庭の遊具が少なく、遊びが限られるので、身体を動かす活動を、より意識して設定する必要がある。	C ・チャレキングで経験した動きを、「おはようタイム」や「なかよしタイム」の時間に取り入れ、身体を動かしたり、運動遊びとして設定したりして取り組む。
	(小) ・体力の維持・向上 ・動きの経験の拡大	・体を動かすことを好む子どもが多い。 ・生活経験の少なさから遊びや活動が広がりにくい。	体を動かす楽しさを知り、進んで体を動かそうとしている。	中間休憩のサーキット活動や外部講師の指導の機会(チャレキング、ダンス等)を設定し、様々な動きの経験、体力の維持向上を図る。	・天候に応じて中庭や体育館等で鬼ごっこや竹馬等をして、友達と関わりながら体を動かす機会を設定した。教師も適宜遊びに入って遊びを広げた。 ・週2回のレッツチャレンジタイムでは、大縄跳びや行事で発表するダンス・体操を行い、経験の拡大を図った。チャレキング講師の指導では、普段できない体の使い方を教わり、運動量も確保できてい	B ・引き続き、体力向上と動きの経験拡大を図るための取り組みを行う。 ・秋から冬にかけて予定している外部講師によるダンス指導を通して、身体表現の力も伸ばしていく。
	(中) ・基本的な生活習慣の定着(挨拶・服装・言葉遣い) ・基礎体力の向上(運動への積極的な参加)	・友だちとの活動を楽しむことができる。 ・基本的な生活習慣の定着に課題がある。 ・学習に向かう基礎的な体力が充分ではない。	基本的な生活習慣や学習に向かう基礎体力を身につけている生徒	基本的な生活習慣(挨拶・身だしなみ・場に相応しい応答等)の定着と基礎的な体力の向上を図る。	基本的習慣については、年度当初から毎日、朝の会で伝えることで、教師が声をかけなくても自分たちから挨拶したり、場にふさわしい言葉を使うことができるようになってきた。また、鏡の前で身だしなみ確認する機会が増えた。 昼休憩は、5人で何をするかを相談し、体育館や教室で身体を動かしていることが多い。	C 挨拶や場にふさわしい言葉の使い方について、引き続き毎朝、声かけを行う。
	(高) 生徒の挨拶等への意識向上と習慣化	・部活動にやりがいを持ち、積極的に体を動かすことを楽しみ、スポーツを楽しむ、積極的に大会へ参加している。 ・挨拶や返事、提出物等が習慣化していない生徒が多い。	挨拶や返事、提出物等の習慣が身に付いている生徒	生徒アンケートや日々の生活・学習を通して、挨拶や返事、提出物等への意識向上と習慣化を図る。	現場体験学習前に生徒アンケートを実施し、前回(R6年1月)よりも返事や提出物について若干改善が見られた。自主的な挨拶、自己評価と他者評価のズレについては、各学級で話し合った。	C 特に挨拶については、マナーアップ運動や学校祭など機会を捉えて指導していく。
	(生活安全部) ・健康で安全な生活習慣の徹底 ・健康維持を意識し、体を動かす楽しさを知る活動の設定	・運動を楽しむ子どもがいるが、継続な取組にはなりにくく、行事に向けた単発な活動になっている。 ・学校保健計画、学校安全計画、学校給食計画をもとに様々な取組を行っているが、日々の実践につながりにくい。	進んで体を動かし体力をつけるなど、子どもが健康な生活習慣の大切さを理解し、実践しようとしている。	・長期休業の事前・事後指導の充実を図り、生活習慣(生活リズム)の見直しを行う。 ・全校遠足、駅伝大会など楽しく身体を動かす活動を計画する。 ・各学部の実態に応じて健康維持を意識した取組を実施する。	・長期休暇明けに生活リズムアンケートを実施し、生活リズムを見直す機会を設けた。また、生活アンケートを集約し、幼児児童生徒の生活実態を把握し休日の生活習慣に課題がみられることがわかった。 ・全校で体を動かす活動として「とりろうピック」を陸上競技場を借りて実施した。先輩からの動かし方を学んだり、継続して体を動かす大切さなどの話を聞いたりした。体を動かすよさを感じる機会となった。 ・中学部で総体に参加するなど、各学部で実態に応じて健康維持を意識した取り組みを実施した。	B ・個々の幼児児童生徒が、休日の生活習慣の見直し(朝食を食べる・電子機器使用時間を決める、睡眠時間の確保)ができるような機会を設ける。保健だよりを通して家庭にも啓発を行う。 ・駅伝大会などの機会を利用し、継続して体を動かす取り組みを継続する
4. 業務改善 ⑥子どもと向き合う時間を 充実するための業務改善	(働き方改革) ・業務分担が行われ、適切な業務遂行がなされている。	自分自身の働き方にメリハリをつけ、自己管理の意識が高まってきている。しかし、年度始めや行事前に業務が集中してしまう傾向にある。	・月45時間以上の超過勤務者数、年360時間以上の超過勤務者数1割未満。 ・業務支援員の積極的な活用。	・毎月2～3回の帰らーデイを設定し、計画的な業務、時間の使い方の意識を高める。 ・役割分担、業務改善へつなげることができるよう、時間外勤務の理由の聞き取りを行う。	・帰らーデイを設定することができた。また、2学期より18時以降30分おきに管理職が時刻コールを行い、時間意識を高めるような働きかけを行った。 ・超過勤務が多い職員へ面談を行い、改善へ向けてのアドバイスをを行った。	C ・時間内に仕事を終える意識を高めるため、引き続き、帰らーデイの設定、タイムコールを行う。 ・超過勤務時間をセルフチェックする習慣化を図り、月45時間以上にならないような働き方を意識できるようにする。 ・管理職による勤務時間実績の確認を行うとともに、超過傾向の職員に対して面談等を行う。
	(円滑な学校運営) ・各学部主事主任、分掌部長が活発な意見交換、斬新なアイデアを出せる会議の開催。	・行事・研修等で前例の踏襲ではなく子どもたちの状況や学校の方針に応じた提案が多くなっている。しかし、中には、今までの手法にこだわりがあったり、変化を受け入れるのに不安があったりする職員もいる。	・各分掌・学部行事等に新しい取り組みが加わり、戦略を意識した活動が考えられており、子どもたち、教職員に成長がみられる。	・運営委員会、主事会等の会議の中で、活発に意見を言うことができる雰囲気を作る。	・とりろうピックや学校公開時の手話カフェなど、新しい取り組みも増えてきている。 ・身体作りの取り組みに全学部が取り組み、楽しく身体を動かす習慣が付いてきている子どもたちも増えている。	B ・取り組みを進めていくため、今年度の戦略事業を教職員全員に再度周知する。

評価基準 A:十分達成(100%) B:概ね達成(80%程度) C:変化の兆し(60%程度) D:まだまだ不十分(40%程度) E:目標・方策の見直し(30%以下)